

# に問われる 本当の論戦とは～

政界展望



国会は真の運営、そして本当の論戦になっているとは思えない

ジャーナリスト

鈴木哲夫

# 予算は成立したが… ～迷走国会、与野党



## 自民党内事情と野党の思惑

新年度予算が2024年度内（3月）に成立した。

今国会は、少数与党という異例の構図でここまで進んできた。特に予算に関しては自公にとつていかに通すか大難関だったはず。ところが終わってみれば…、だ。

石破首相は「（少数与党は）むしろ好機で逆に野党の意見も聞く熟議の国会」とした。



野党の意見も聞く熟議の国会

しかし、そうだろうか。厳しい表現だが、私は「熟議」どころか、「妥協」と「密室」国会ではなかったかと思う。

高校無償化や103万円の壁など、結局テーマごとに野党各党と自公との三者による「密室」協議が行われた。裏でどんな取り引きがあつて、三者にどんなウインウインの目論見があつたとしてもそれは表に出ないわけだ。たとえば高校無償化などは公立教育の衰退なども併せて、もっと平場で議論すべきだったのではないか。

また、昨秋の総選挙で有権者が示したのは「自公にノー」だった。ならば、野党ががつぶりとスクラムを組んで政府・与党と向き合い、それに対抗する国家像や予算案を示せというのが民意ではないのか。にもかかわらず野党の一部は、自分たちの個別の話を通してくれれば与党の本予算に賛成するとしてきた。

本予算は国家像である。自公の作った本予算案に賛成するというのは、もはや与党であり「妥協」の政



自分たちの個別の話を通してくれれば  
与党の本予算に賛成する

治ではないか。

国会は真の運営、そして本当の論戦になつていないと思えない。

予算審議も含め、前半国会は迷走した。次々に新たな問題が露呈したからだ。

「法律に抵触するものではありません。これは、会食のお土産代わりにご家族への労いなどの観点から、私自身の私費、ポケットマネーで用意をしたもの。総裁としてご苦勞をかけてすまなかつたということ



あつて、政治活動に関する寄付でもない」（記者会見で）

「政治活動に使ってくださいなどという意図は毛頭なかった」（参院予算委員会）

だが、どれだけ「違法でない」、「申し訳なかった」と繰り返ししたところで、明らかに変わった石破茂首相の初当選組への10万円の商品券お土産はやってはいけない。

3月と言えば、国民はちょうど確定申告で1円の領収書にまで苦心し、この春からさらに約5000品目の値上げなど物価高に苦しんでいる。そんなときに、10万円という額の大きさや、おまけに一連の裏金事件の真相究明もまだまだなのに反省すらないのか。国民が怒るのも当たり前前だ。

マスコミの世論調査も内閣支持率は一気に下落。3月17日付の朝日新聞26%（前回比14ポイント減）、毎日新聞23%（7ポイント減）、読売新聞31%（8ポイント減）。当たり前だ。

3月13日夜に、新聞やテレビで一斉に報じられたこの問題。

3月3日夜、石破首相が公邸で先

の総選挙で初当選した自民党衆院議員1期生15人と会食した際に、首相事務所が事前にお土産の名目で1人10万円分の商品券を配っていたというもの。石破首相は違法ではないとしているが、個人から政治家に対する金銭等の寄付などを禁じる政治資金規正法に抵触する可能性も否定できず、市民団体は違法だと告発状を東京地検特捜部に提出した。

元々石破首相は、過去ずっと政治とカネの問題には厳しい意見を主張しクリーンなイメージがあった。加えて「党内で仲間や若手に奢ったりもてなしたりすることすらしない。ケチだ。だから人望がない」（旧安倍派閣僚経験者）と皮肉られるなど、後輩や仲間にも過剰に振る舞うこともしなかった。だから逆に余計に今回の10万円商品券は、なぜそうしたのか批判と疑問が噴出した。

背景について、石破氏に近い自民党ベテラン議員が明かした。

「総理になったら公邸で必ずやれと（石破首相に）相当いろんなどころから言ってきた。それも、1回生、2回生、3回生、4回生、国対（国会対策）、公明党、政務官、副大

臣、閣僚とそれぞれ個別に呼んで振るまえと。それが恒例だ。言ってきたのは、かつての派閥幹部、閣僚OB、以前官邸に入っていた議員などだそう。石破さんは党内基盤が弱いから、そう言われるとやらなきゃいけないし、恒例なんだからと。首相になってからそうした進言を丸呑みしている。たとえば今回の当選1期生の会合もまさにそれ」

確かに党内基盤の弱さは、石破首相本人が吐露した。昨年末、石破首相は私との一対一の取材でこう言った。

「自分は総裁選で圧倒的な差で勝ったわけでもなく党内基盤は脆弱。普通首相が何かをやらうとすれば党内の議連とか動いてくれるんだがそれがほとんどない。らしくありたいけど実際に総理総裁になった時にそれが維持できないのが相当辛い。きちんと党内にも協力を求めながらひとつひとつやって行くしかない」

前出ベテランはこう続けた。「党内に気を遣い過ぎるから、これまで主張してきた政策を封印したりして石破らしさをなくして行って

いる。10万円の商品券問題も同じように党内基盤の弱さの延長線上にある。企業団体献金など政治とカネの議論も今最中だった。そんなときに配るなどあり得ない。党内に目が行き過ぎて自分を見失ってははいけない」

しかし、なぜこの問題が、一気に表に噴き出したのか。

ことの時間的経過を見ると、党内の誰かが意図をもってリークしたのではないかという諸説が飛んだ。

自民党幹部のひとりが言う。

「公邸に招待された1回生議員たちが、商品券をもらったのは本当に良くないと言うなら、配られたのが3月3日なんだから、せめてその翌日とか翌々日に石破首相に返し、ことを明らかにしてもいい。ところが報じられたのはじつに10日後。この間に何か裏でこの件をあれこれマスコミにリークした者がいるだろうという話になっている。10日間という時間が怪しい」

そして、この幹部は、「この話は







事前に事務所関係者が菓子と商品券が入った紙袋を持参

石破首相にマイナスになる話。すると当然反石破の誰かではないかと何人かの名前が挙がっている」と話す。ところが、石破首相に傷をつけるためにリークしたのが誰であろうか、商品券配布問題は、単に石破首相の個人の問題ではなくまったく違った展開を見せ始めたのだ。

なんと、商品券が報じられた翌週明けあたりから、「過去にも首相公邸の会食でお土産はあった」と自民党参議院議員など内輪からの発言が会合やネットメディアなどに少しずつ出始めたのだ。

つまり、歴代首相が、公邸で行ったあらゆる会合で、仕立券や商品券が慣例として渡されてきたというのだ。

こうした事実について、たとえば時事通信の3月19日の記事。

まず岸田前首相。2021年から3年間の在任中、政務官や副大臣に就任した自民党議員が公邸での会合に招かれた際、事前に岸田事務所関係者が議員に紙袋を持参。そこには菓子と商品券が入っていたという。

岸田事務所は「会合は法令に従い適正に行っている。それ以上についてコメントは差し控えたい」と時事通信の取材に文書で回答したという。

その前任、菅義偉元首相は、取材に対して菅事務所は「土産を差し上げたことはあるが法令の範囲内で



法令の範囲内で適正に行っている

「適正に行っている」と回答。

また、麻生太郎元首相は、取材に対して事務所は「商品券を配布したことはない」と明言したが、別のテレビメディアの取材に対しては「国会議員との会合の性質に応じて、適宜適切に処理しております」などと答えている。

要は3人とも、法令の範囲内と注釈しているがお土産が慣習化していたことが明らかになったのだ。

私も独自にあたった。これまでの取材でよく知る自民党の衆参元議員や現職など12人に訊いてみた。すると…。

「ときの総理の会合でお土産をもらった」

なんと全員がそう語ったのである。驚きの証言ばかりだった。



商品券を配布したことはない

たとえば1900年代に当選し以後、衆参合わせて20年以上議員を務めたOB議員。

「初当選組を集めた総理主催の会合でお土産に30万円の銀座の有名紳士服店の仕立て券をもらった。30万のズツなんて着たことなかったから10万を3着にした。当たり前にもらって何の違和感もみんななかった」

小泉純一郎・第1次安倍晋三・福田康夫・麻生太郎各政権時代の自民党衆議院議員で、2009年民主党への政権交代選挙で落選した当時3回生は。

「総理主催の当選回数ごとの会合が公邸であって、10万円の有名靴店の商品券をいただいた。その時に引き換えた高価な靴、いまでも大事に履いている」

安倍長期政権の際に当選した現4回生議員。



「初当選組の会食のときと、国対（国会対策）関係者の公邸での会合で、10万円の商品券がお土産でした」

全員が、仕立券や商品券が慣例として渡されてきたことを話した。

今後、商品券問題の行方はどんな展開を見せるのか。まず自民党内。自民党閣僚経験議員は言う。

「党内では、反石破の旧安倍派議員や夏の参院選を控えた立候補予定者や地方組織が、石破首相では戦えない、退陣だなどと声を上げていたが、商品券が慣例だったとなると、騒げば騒ぐほど今度は石破首相個人の問題ではなく、自民党全体がカネにルーズなダメ政党だという批判に変わる。参院選などは逆に大きなマインナスになる。すでに旧派閣幹部らが過剰な石破首相批判や商品券問題を口にしないうよう箝口令を敷いている。党内は静観に変わっている」

また、ポスト石破を狙う面々について、党幹部のひとりがこう話す。

「いまトップになったところで商品券の自民党を背負って少数与党で苦労しかない。ポスト石破とされる面々があまりこの商品券で石破首相を突き上げていないのはそこだ。こ

とが収まるまで待つて参院選勝敗次第での石破おろしがどうなるかということだろう」

一方の野党だが、立憲民主党幹部は、「いま不信任だとか動くも国民生活直結の予算成立が混乱する。参院選を考えれば退陣ではなく石破首相で引く張って行って戦う方が有利」。日本維新の会幹部も、「商品券問題がこじれて予算に影響が出たら、うちの通した高校無償化などウリがムダになる。予算は通して商品券は長引かせて参院選にまで持つていく」。

このように、自民党内事情と野党の思惑双方で、石破首相は微妙なバランスの上に低空飛行ながら安定し乗っているということだ。

### 課題は石破政権のガバナンス

ただ予算案採決直前で政権サイドからまた新たな問題が噴出した。

3月25日、石破首相は連立を組む公明党の斎藤鉄夫代表と官邸で会談した。

「予算案の最終局面の対応が話の中心だった。じつは石破・斎藤は個人的には自公の野党時代から、また

選挙区は同じ中国地方で選挙応援などいい関係。本音で話せる。そこで、物価高対策などを、世論や参院選も考えて二の矢三の矢で政権浮揚をと突っ込んで話したようだ。それが仇になった」（首相側近）

会談後、斎藤代表が「石破首相は、予算成立後、強力な物価高対策を速やかに策定する」と記者団に話したのだ。

これが報じられると野党からは、一斉に猛烈な批判が上がった。当然だ。



国会や参議院の冒とくであり許せない

「耳を疑うようなニュースが飛び込んできた。石破首相が予算成立後に速やかに強力な物価高対策を策定？いま予算案の審議をしている最中なのに何なのか。国会や参議院の冒とくであり許せない」（立憲民主党参院幹部）

「いまさらそんなことを言うならなぜ本予算案の中に入れなかったのか。石破首相は、この本予算案に物価高騰も踏まえた十分な措置を盛り込んでいると答弁してきたではないか。あれは嘘だったんだ」（日本維新の会幹部）

それにしても、商品券にしろ、今回の問題にしろ、なぜたびたび迷走するのか？

官邸や石破首相周辺を取材すると背景は2つある。

1つ目は「官邸、そこに党も含めた政権のガバナンスの問題」だ。石破首相に近いベテラン議員が言う。

「予算成立でもめているのに、それを飛び越して先の話の物価高対策をやるって表に出すこと自体が間





参議院の予算審議に大変迷惑をかけた

違っている。そう言ってしまうと、じゃあこの予算案では十分じゃないのか、参議院軽視だとなるのは当たり前前。たとえば公に言うなら『まず現時点で最良と考えた予算を通して、その後も切れ目なく手を打っていききたい』とか言い方はあったはず。そんなところまで誰もチェックしていない」

今回口にした物価高対策は、支持率低迷や来る東京都議選、参院選などへ向けての戦略と見ていいが、前出ベテランは、単なる石破首相の言葉ではなく、それをどう戦略的に展開するかというガバナンスの欠如を指摘する。

「重要政策をやるうとしてたり、いまのような本予算の成立など最大の

ヤマのときには、官邸の官僚秘書官、官房長官、財務大臣や重要閣僚、そして党側は国対委員長や幹事長などが常に連絡を密にして、何をどういう順番で進め、発言の役割を決めるなどしなければならぬ。それができていない。旗を振る役目がその中のいったい誰か分からない」

たとえば、安倍晋三政権時代。あれだけ強権政権でやりたい放題だったにも関わらず、たとえば消費税10%のとき、当時私は菅義偉官房長官から聞いたが、菅氏、麻生財務相、官僚の秘書官らは毎日のように顔を合わせ、世論や野党を見ながら、誰がどんな順番で発言を分担し、党の二階俊博幹事長や国対とも連絡を取り合って動いてきていた。

2つ目は、公明党との連携だ。公明党OB議員が言う。

「今回、物価高対策をやる」と表に出たのは、会談後の斎藤代表が話したから。2人は信頼関係があるが政局は得意じゃない。たとえばこの話はタイミングを見るとか、わざと自公で対立させてどちらかに花を持たせるとかそういう芸当ができない。そういうことをやる自公の裏方の人

材もない。うち（公明党）もそれを育ててこなかったし向こう（自民党）もないから安定しない」

斎藤代表はその後、党の幹部会合で自らの発言をめくり、「参議院の予算審議に大変迷惑をかけた」と陳謝したが、自公の連携ができていないことは大きな課題だ。

後半国会も重要課題は目白押しだ。

選択的夫婦別姓、企業団体献金、商品券問題など自民党の新たな政治とカネ、高額療養費制度、年金改革法案、森友学園文書公開、戦後80年総括…。

妥協や密室や脆弱な政権体制ではどれも明快な決着とはいかない。夏の参院選を見据え、与野党各党が一層選挙目当ての手練手管で政局に絡めて行くだろう。

これら、政策課題を前へ進めるのは、世論に近いはずの石破首相の決断と邁進が最も重要なのは言うまでもない。

(了)

